

「満 83 歳になった」

2024 年 04 月 22 日

私は満 83 歳になった。童謡に「村の渡しの船頭さんは今年 60 のおじいさん」という歌がある。子どもの頃、60 と言えば老人であった。それを 20 年以上も超えたのだから、長く生かされたものだと、我ながら驚く。父は 80 歳、母は 93 歳で亡くなり、長兄は 83 歳、次兄は 82 歳で亡くなった。姉と三兄は存命で、私の家系は長寿なのかも知れない。

私は 1941 年 4 月 19 日に、旧満州国大連市で生まれた。私の後にも子どもが生まれる予定であったが、母が電車の中で倒れ、その子は死産した。お陰で、私は末っ子として、家族から可愛がられて育った。大連の記憶は色々あるが、戦前、戦中は比較的恵まれたが、戦後は悲惨な生活となり、敗戦による違いを印象深く覚えている。1947 年、最も遅い引き揚げで、父の故郷、大分県杵築市の八坂に帰国した。丸裸で帰国したので、父母は 5 人の子ども達に食べさせるため懸命に働いた。引揚者は皆、苦勞をしたが、父母の苦勞は並大抵ではなかった。それを見て育った私は、働くことは当然で、怠けることを知らなかった。小学校、中学校と進み、元気のいい、少年時代を過ごした。しかし、高校生の頃から、青春の嵐に襲われ、自分とは何か、生きるとはどういうことなのかと思い巡らすようになった。そして、悩み苦しみの中で、虚無的な思いに捕らわれていき、仏教に救いを求め、寺の住職を訪ね、仏教研究会に熱心に通った。ある日、住職が「君はキリスト教を知っているか」と言われた。町に教会があることは知っていたが、私の環境は仏教と神道だけであった。住職は、この青年は仏教では救われないとキリスト教を勧めたのではないかと、今思う。住職の言葉で、初めて教会に行ってみた。日本基督教団杵築教会の吉新治夫牧師と出会った。この出会いが、私の決定的な転機になった。私は、旧約聖書の神を中心にした喜びと苦しみに葛藤する人間の生き様に心を奪われた。また、イエス・キリストという人の愛の奥行に魅せられた。更に、牧師から読書指導を受け、キリスト教の広さと多様さ、全く知らなかった文化を知らされた。私にとって、キリストが私のような人間でも「生きよ」と是認してくださるメッセージが福音であった。他人からどう言われようと、自分をどう評価しようと、神はキリストにおいて「よし」としてくださることを聞いた時から、生きることに向かって意欲と希望を得た。この福音を語る牧師になりたいと、心を決めた。両親は認めてくれなかったので、アルバイトでお金をため、神学校に入った。

神学校の 6 年間の生活は同じ思いの友人たちと楽しく過ごしたが、週 5 日くらいの家庭教師のアルバイトに追われた。卒業後、東京の下谷教会で伝道師になり、結婚した。しかし、神学校時代の過勞による疲れが抜けず、牧師であることにも慣れず、うつ病に陥り、苦しんだ。その後、延岡三つ瀬教会で 8 年、生きること苦勞していた人々と出会い、その人々の信仰に生きる姿を見て、多くを学び、励まされた。熊谷教会で、約 4 年仕えたが、教会幼稚園の経営には苦勞した。そして、横浜港南台教会（赴任時は洋光台港南台伝道所）に遣わされた。私の夢は開拓伝道をするのであったので、楽しかった。会堂を建て、31 年間、開拓伝道に当たった。自立した教会に成長したので、若い後任牧師に委ね、73 歳で隠退した。47 年間、牧師をしてきたが、思い出すと恥ずかしく慙愧に堪えないことばかりで、消え入りたいような思いに駆られるが、こんな私が赦され、福音宣教の業の一端に加えられたことに感謝すべきであろうと思いつけている。隠退後は、憲法 9 条を守る、脱原発、沖縄県民に心を寄せる市民運動に参加している。年を重ねると、体力、知力を奪われるだけでなく、友人も失っていく。心に寂しさを感じざるを得ないが、神に生かされている恵みに応え、最期まで牧師の志を全うできたらと願っている。